

「信頼されている」
(マタイによる福音書25:14-15, 19-29)

天の国とは、どのようなところでしょうか。今日の福音に聴きましょう。

主人はしもべに財産を託し、旅にでかけます。主人が留守の間、それをどのように使うべきか、指示は一切出しません。主人が僕たちに預けた財産は、とてつもない金額です。一タラントンは六千日分の賃金ですから、五タラントン預けられた僕は、生涯収入を遥かに超える額を預けられたこととなります。指示もなく、それほどの金額を僕の裁量に任せたのは、それほどに主人が僕を「信頼」していたからです。主人は各自の力に応じて異なる額を委ねました。それは公平さを欠いているのではなく、むしろ「神は超えられない試練は与えられない(1コリ10:13)」という聖句にある通り、主人が僕をよくよく知っておられることの表れです。

さて、五タラントンを預けられた僕は、それを元手に商売をし、なんとさらに五タラントンをもうけました。二タラントンを任された僕も同じように、二タラントンもうけました。五タラントンもうけた僕は主人に対して「五タラントンお預けになりましたが、ほかに五タラントンもうけました」と報告します。これもまた同じように、二タラントンもうけた僕も、全く同じように成果を報告します。この二人の僕は、主人が自分たちのことを信頼して財産を「預けた」という事実によって行動しました。彼らは、とてつもない金額を指示もなく任せてくれた主人の「信頼」を感じることができていたのです。その信頼の大きさを理解した僕は、もうけることができるのです。この二人に対するねぎらいの言葉は、もうけた金額に関係なく、まったく同じです。「忠実な良い僕だ」という言葉に表れているように、主人は金額の大小を問題にするのではなく、主人の信頼への応答を喜んだのです。

しかし、一タラントンを預けられた僕は穴を掘り、「主人の金」を埋めて隠しました。たしかに、主人の財産を損なわないためには、穴に埋めることは安全な方法だと言えます。さらに、当時は穴に預かりものを隠せば、それが盗まれても賠償する義務はありませんでした。とにかくこの三人目の僕は、「主人の金」を少しも減らさないことに心を注ぎ、たとえそれが失われたとしても、自分が責められることがないようにと考え、実行したのです。なぜなら、彼にとって預けられた財産は、「主人のもの」だからです。

三人目の僕の報告には「預けた」という言葉が出てきません。彼は、主人が自分にタラントンを預けてくれた信頼に気がつくことができなかつたのです。主人の信頼を理解できなかつた彼には、主人がただ「厳しい人」と映っています。この僕を、主人は「怠け者の悪い僕」と呼びます。主人を恐れ、信頼に応えようとしなかつたこの僕は、他の二人のように主人からますます信頼される「忠実な僕」にはなれませんでした。

「天の国はまた次のようにたとえられる。」とはじまる今日の福音。天の国とは、わたしたちを信頼する神と、その信頼を受けた人々がそれに応えようとする、神と人との応答し合うところに実現するのです。この応答に身をおいた「忠実な良い僕」

たちを、主人は「一緒に喜んでくれ」と宴に招きます。この宴こそ、天の国に他なりません。主人との交わりに生きるなら、わたしたちはこの宴へと迎えられるのです。

この世の「教会」という大きな財産が任されているわたしたちが、このことに神の信頼を感じるのか、それとも恐れに囚われてしまうのか。わたしたちが信頼の道を選ぶためには、わたしたちを信頼し、それぞれの力に応じて「タラント」を委ねてくださっている神のその信頼にのみ頼る時だけです。わたしたちにそれぞれに、神の信頼に応えるための「タラント」が与えられていることを、あらためて信じましょう。